

△目録▽

国立国会図書館所蔵

勝海舟文書について

付・勝海舟文書仮目録

広瀬順皓

1

本稿は、当館憲政資料室に所蔵されている勝海舟文書の概要を示そうとするものである。勝海舟の人物や言動や事跡については、『続再夢紀事』や『戊辰日記』といった当時の史料を始め、『氷川清話』・『勝海舟言行録』といった類のものによって、さらには、明治以来数多く刊行されてきた、伝記・評伝・小説等によって、広く人国に膾炙（かいしや）しており、維新の英雄の中でもその人気は高い。また、海舟の残した著作や書翰・日記については、古くは昭和初期に発

行された「海舟全集」（十巻 改造社刊 昭和二〜三年）や、現在新しく刊行されている二種の「勝海舟全集」によって、その大要をたやすく知ることができる。したがって、本稿では、現在当館に所蔵されている勝海舟文書のかんたんな目録を示し、あわせて彼の足跡の一端を素描するにとどめておきたい。

2

勝海舟は、文政六年江戸に生まれている。江戸文化が類産（るいさん）の兆（きざし）を見せ、日本近海にしばしば外国船が出没し、よ

うやく世上騒然としはじめたころである。それから明治三十二年七十七才で没するまでの彼の生涯は、幕府の崩壊から明治新政府の誕生を経て、近代国家を確立するに至る、近代日本の転回期のほとんどすべてをカバーするものであった。しかも、彼は幕末維新の激動期においては枢要の地位にあり、特に西郷と勝との会談によって成功した江戸城無血開城は、彼の生涯のクライマックスであった。明治維新以後は目立った政治活動はしていないが、海舟書屋と名づけた氷川の手舟邸には千客万来し、一種の勢力を有していた。前述の改造社版『海舟全集』の刊行趣旨は、彼の生涯を次のように要約している。

「……先生の全生涯を案ずるに、之を三大期に区分することが出来る。即ち第一期に於ては、徳川旗下の英俊児として其錐尖を顕はしたる時代にして、……身を海軍に投じ、威臨丸の船長として太平洋を横断し、世界的知識を吸収したる新知識者である。又征長の役の跡始末に際し一幕府の破綻を弥縫し、外交家としての手腕を顕はしたる時代にして、他の一方に於いては我帝国海軍の創始者として最も其創業に貢献した第一人者である。

又第二期に於ては、幕末の一大過渡期に於ける偉大なる経世家として、尊攘党の代表者たる西郷南州との談判に於て、三百年の幕府を談笑の間に受取し以て虎視眈々たる列強をして一指をだに触れしめず、開国維新の事業を扶翼し

たる第一人者である……。

更に第三期に於て、先生は、滔々たる俗塵の外に超越し、曠世の哲人として微字世を調し、放談俗を警しめ、或は万古の股憂を写して天閨に達し、或は限りなき興懷を風月に洩らし、……善其晩節を全うした。」

いささかほめすぎのきらいもあるが、代表的な海舟像をよく表わしている。彼の伝記や評伝の多くも、この文章でいう第二期をもって終わり、明治維新以後の海舟は、「悠々自適」といったふうにし描かれていない。しかし『氷川清話』などをみると、談話録という点を差し引いてみると、明治新政府に対しても相当に厳しい態度をとっているようにも思え、また彼が新政府に対して出した建言・建白の類も決して少ない数ではない。明治維新以後の彼の活動をみると、海軍大輔、海軍卿、参議を歴任し、明治八年官を辞した後、明治十年代から二十年代にかけて精力的な著作活動を行なっている。すなわち、『海軍歴史』、『陸軍歴史』、『吹塵録』などの幕末の制度・歴史をまとめ、更に、『外交余勢』、『幕府始末』といった著作を世に出しているのである。こうして明治維新以後の海舟は、政治の第一線からは引退して、幕末史等の編纂・著述を行ないながら、たえず現実の政治を見つめ、新政府を批判し激励しているのである。

さて、当館に所蔵されている勝海舟文書は総数三三八点よりなり、その内訳は三二四冊・十袋・四巻である。これらの大部分は、朝倉治彦氏が『国立国会図書館月報』一五七号で述べられているとおり、太田区洗足の旧海舟記念館にあったものが、戦後の混乱期に古書店に出たものを購入したものである。本文書は大別すると次の三群になる。

- (一) 勝海舟稿本および書翰類
- (二) 勝海舟蔵書
- (三) 蘭文写本等

これらをもてみてもわかるように、本文書は、通常の文書と異なり、海舟宛の書翰あるいは彼が職務上関係した書類といったものは少なく、ほとんどが彼の蔵書および稿本より成立している。これは前述のように、本文書が勝家からのものでないがためであろうが、閲覧者にとって残念かも知れない。

この勝海舟文書の中心をなすものは、なんといつても(一)の勝海舟稿本および書翰類であろう。この中には前述の『陸軍歴史』、『吹塵録』等の稿本が何種類か含まれており、また彼の著作の大部分も稿本あるいは刊本の形で含まれている。その他には、松平春岳の海舟宛書翰、海舟遺墨なども含まれている。また(二)の海舟の蔵書は、前記の幕末

史編纂のために収集したものおよび勝家所蔵のものよりなり、中には『長崎海軍伝習所伝習人名簿』、『蒸気汽械全書草稿』、『軍法不備』など、彼が直接タッチした事がらを思わせるものもある。(三)はいわゆる蘭書であり、主として兵学関係のものであるが、他に辞書文法書も含まれている。

また、勝海舟文書からはちよつとはなれるが、憲政資料室に所蔵されている文書の中には、彼に関係のある文書がいくつかあり、それらを見ることによって、海舟の人物や行動を追跡することができる。その意味で興味深いのは、「大久保一翁文書」である。大久保一翁は海舟をはじめ幕府に登用した人物であり、松平春岳らとともにいわゆる公武合体派として活躍し、維新に至るまで海舟と協力した人物である。この「大久保一翁文書」には、幕末から明治初年にかけての一翁・春岳・海舟の書翰が多く含まれており、当時の事情を誌した『続再夢記事』、『戊辰日記』等とともに、第一級の史料といえる。勝海舟に関係が深く、あまりしられていない文書として、ここに紹介しておこう。

ところで、先に勝海舟は、明治以後には官から退き、幕末史の編纂や著作をしつつ、時々新政府に対し建言をなしたと述べたが、それは彼にとって一体どういうことであつたのだろうか。目録の解説としては不適當であるかも知れないが、維新以後の海舟の言動の一端を次に述べておきたい。本文書を利用する上で、参考になれば幸いである。

明治になってからの海舟を語ることはむずかしい。幕臣でありながら自ら幕府の最後に手を下したことのゆえか、すぐれた政治家でありながら、政權から離れて無聊をかこつていたゆえか、『氷川清話』等より見られる海舟の姿はひとくせありげに思われるからである。彼は、幕末史関係の編著を出版しながら、海舟書屋を訪れる人々に對し痛烈な政府批判を行ない、時勢や人物を奔放な口調で論じ、政界から引退したといつても、条約改正・日清戦争などの大きな問題については、時々建白書を政府に提出するなど一応の政治力も持っている。海舟のこれらの行動は何に由来するのであろうか。

さて明治新政府に對する旧幕臣の態度に關してはおおよそ二つの方向が考えられる。新政府の中に入って、新政府の一員となるか、あるいはあくまで新政府の外にあってそれを批判しつづけるかである。榎本武揚は前者の代表であり、後者には成島柳北、福地桜痴といった明治初期のジャーナリストたちが考えられる。海舟はどちらかというところ、後者の道を選んだ。確かに彼は參議になり、海軍卿にもなっているが、それはたぶん西郷や大久保といった人々とのつながりによるものであろう。しかも彼はそれを自ら進んで受け入れた訳では決してない。彼の伊藤博文や大久保利

通に宛た^{あて}当時の書翰をみると、彼は「腦病相発し」とか「リューマチス膝下に相附」とかいって任にあることを決つてゐるし、また年譜によると、明治二年にも外務大丞、兵部大丞などを即日または数日の内に辭退しているのである。そして西郷が西南戦争で死に、大久保が暗殺されると、代わつて政治の実權を握つたのは、伊藤博文や山県有朋であり、彼らと海舟とは一世代異なつており、自然政界から身を引いていくようなことになつたのであろう。

しかし前述のように、海舟の政治に對する関心は全くなくなつた訳では決してない。彼の書いた建白書や『氷川清話』などを見ると、彼は次のようなことを考へていたようである。すなわち、彼は最後の幕臣として、徳川幕府の功罪を明らかにし、徳川家の人々や、その家臣たちの代表者として新政府に對処していこうということであり、それは同時に自らもその成立に手を貸した新政府のあり方を、折に触れ批判していくことも意味していた。

前者については、『海舟座談』の明治二十九年十月十七日の項にこんな言葉がある。

「三十年來、徳川一門を固めておいた。みんなヲレの言う事を聞くから、マサカの時には國家の御用をすることの出来るようにしてある。……」

このように、彼が徳川の旧家臣たちをまとめ、その世話をしたことは、各所にある彼の書翰や、その座談などから

もみてとれる。また彼の編纂になる『開国起源』・『海軍歴史』・『吹塵録』なども、この文脈の中において考えると、いっそうその意味が明らかになるだろう。

後者については、『氷川清話』などの中に多くでてくるが、そのうちの一つだけあげるにとどめる。それは田中正造の直訴事件で有名な足尾鉍毒事件についてである。

「鉍毒問題は直ちに停止の外ない。今になってその処置法を講究するのは姑息だ。まず正論によつて撃ち破り、前政府の非を改め、大綱を正し、しかして後にこそその処分法を議すべきである。……前政府の非を改むるは現政府の役目だ。非を飾るといふのは宜しくない。旧幕は野暮だといふのならそれで宜しい。伊藤さんや陸奥さんは文明の骨頂だといふじゃないか。文明といふのは、よく理を考えて民の害とならぬことをするのではないか。」(『海舟座談』明治三十年三月二七日)

ここには海舟の明治政府⇨近代日本に対する考えが端的に表現されているように思える。彼が自ら手を貸して成立させた新政府の「文明開化」⇨近代化政策が、実際は国民を苦しめている。この直前の日清戦争についても、海舟はそれを「兄弟喧嘩」のようなもので、アジアにとって無益なものだといっているが、その日清戦争も日本の近代化のもたらしたものであった。旧幕(封建社会)も野暮だけれども、文明(近代社会)も同じじゃないかという海舟の憤り

の背後にあるものは、決してかんたんに割りきれられるものではなく、複雑な問題を含んでいるように思える。

海舟が最後の幕臣として、またその成立の協力者として明治政府に期待したものの、それが明治以後の海舟の言動の基底をなすものであった。そしてそれが何であるかを明確にしないまま、海舟は死んでしまったのであるとはいえないであろうか。

勝海舟文書仮目録

本目録は、現在憲政資料室で文書を閲覧に供するために用いている仮目録であり、万遺漏の多いものであることは言を俟たない。なお、かんたんな解題を付した。

著作・稿本・書翰等

(1) 開国起源 浄写稿本 四三冊

勝海舟が天皇の命により、天保年間から慶応末年に至る幕府外交関係史料を集取編纂したもの。海舟

の序文の末に明治二四年十月とある。

(2) 陸軍歴史 浄写稿本 三〇冊

- 陸軍省の依頼により、天保十一年より慶応末年に至る徳川幕府建設の経緯を説述したものと。明治二二年と海舟の序文の末にある。
- (3) 陸軍歴史 刊本 上下 二冊
右の刊本。明治二二年二月陸軍省発行。
- (4) 海軍歴史 淨写稿本 二一冊
海軍次官樺山資紀の請により、徳川海軍の創建から、慶応末年に至る海軍の歴史を編述したもの。海舟の序文の末に明治二十一年十二月とある。
- (5) 漢訳海軍歴史 稿本 井上陳政漢訳 七冊
漢訳海軍歴史 中淨書本 井上陳政漢訳 十冊
- (6) (5)、(6)は(4)の漢訳版、海舟の跋を付す。
- (7) 海軍歴史 刊本 九冊
(4)の刊本。明治二二年三月海軍省発行。
- (8) 大日本創弁海軍史 稿本 八冊
漢訳海軍歴史を編纂した後中島雄が增補改訂したもの。明治二六年二月の勝の序文を含む。
- (9) 大日本創弁海軍史 刊本 三冊
右の刊本。明治三九年発行。
- (10) 海軍紀事 自筆草稿 四冊
- (11) 海軍小紀 淨写本 一冊
序文に明治二六年三月とあり。
- (12) 海軍歴史資料 一袋
- (13) 「海軍歴史」編纂のための史料の写。
勝氏海軍塾蔵書目録 自筆原本 一冊
- (14) 海軍括要 自筆校正本 慶応二年 一冊
- (15) 海舟探報 原本 一冊
幕末期の消息等を誌したもの。
- (16) 吹塵録 初稿本 六冊
海舟自筆外題に「海舟雜纂」とあり。幕末史の史料を編纂したもの。
- (17) 吹塵録草稿
- (18) 本邦古來通貨小記 自筆草稿 一冊
- (19) 經濟雜纂 草稿本 一冊
松方正義に呈するためと序にあり。明治二十年。
- (20) まがきのいばら 淨写稿本 一冊
万延元年よりの事々を記述し、所感を述べたもの。「深く筐のそこに秘め置き、我かなき後のかたみなさんのみ」と序にある。
- (21) 亡友帖 淨写稿本 一冊
海舟宛の書翰を集成し、自ら解説を加えたもの。明治十年。
- (22) 漢訳亡友帖 原本 一冊
明治十年刊の亡友帖を漢訳したもの。海舟、黎庶昌の跋を付す。
- (23) 亡友帖 刊本 明治二十三年 一冊

(24) 断腸の記 杉原謙写本 一冊

幕末期の海舟の自伝。明治二十一年七月。

(25) 断腸の記 刊本 一冊

右の刊本。同年十月発行。

(26) 外交余勢・断腸記 漢訳浄写稿本および副本 二冊

(27) 追賛一話 草稿本 徳富蘊峰 人見一太郎筆記 一冊

高野長英、徳川吉宗等徳川中期以降の人物の逸事

および海舟の短評を加えたもの。なお人見一太郎は民友社の記者。

(28) 追賛一話 中浄写本 一冊

(29) 漢訳追賛一話 浄写稿本(未刊本および中浄写本)

明治二十三年 二冊

(30) 追賛一話 漢文 全 浄写稿本 一冊

(31) 幕府始末 浄写稿本 一冊

海舟がクラークのもとめにより、幕府の沿革および大政奉還時の事情を述べたもの。実本小一、富田鉄之助の序・跋を付す。明治二十七年。

(32) 鶏肋 一冊

外交余勢、幕府始末、断腸の記を収めたもの。明治三十年。

治三十年。

(33) 明治二年上書 自筆草稿 一巻

幣制意見

(34) 旧記雑感・旧幕財政小記 自筆草稿 明治二十年 一巻

一巻

(35) 民間有志小伝 自筆草稿 一巻

渋川利右衛門、竹川竹斎を伝えるもの。

(36) 岡田氏遺篋海舟先生手翰 全 一冊

長崎海軍伝習所時代、岡田新五太郎にあてたもの。

(37) 海舟書翰 二通一袋

(38) 海舟伯遺墨 一冊

和歌、漢詩等八首。

(39) 海舟先生遺墨 一巻 漢詩八首。

(40) 勝家断簡 一括一袋

(41) 流芳遺墨 一冊

(42) 海舟戯墨 自画自賛 一枚

(43) 海舟自画像 自賛 一枚

(44) 海舟印譜 一冊

(45) 勝麟太郎親類書 断簡 五枚一袋

(46) 府城沿革 稿本 木林芥舟筆 三十冊 明治二三年

(47) 勝海舟宛 松平春岳書簡 四通一巻

(48) 勝海舟宛 元田永孚書簡 五通一巻

蔵書

(49) 和蘭別段風説書 写本 一冊

- (50) 和蘭人風説書 写本 外題自筆 一冊
- (51) 関東川々水源考 写本 序文自筆 一冊
「御勘定奉行支配御普請役詰所之留記」とある。
- (52) 海防衆説 写本 一冊
安積良斎、佐久間象山等の意見を編んだもの。天保十三年。
- (53) 軍法不審 高野長英自筆本 一冊
表紙に海舟の手により「高野長英真筆同人脱牢之後横谷氏之宅此時送予処」とある。
- (54) 兵制全書 譜厄利亚国部 写本 一冊
イギリス兵制に関するもの。
- (55) 海上砲術 上写本 四冊
ゼーアルチルレリーの訳書。
- (56) 海上砲術全書 宇田川榕庵訳 三冊
原著は「レイドグラアドベイベッド、ヨンデルリクトインデセエアル チルレリー」。天保十四年。
- (57) 三兵答古知幾 高野長英訳 写本 一冊
原著者は、ヘインリフ ホン ブランドト。
- (58) 煩穢用法 杉田成卿訳 三冊
令言解(号令の言葉の訳)を付す。弘化四年。
- (59) 洋外螺機新篇 卷之二 写本 一冊
- (60) 空氣唧筒注水算要 一冊
- (61) 運用約説 写本 一冊

- (62) 機関積杆算記 写本 一冊
- (63) 火輪車運行術 写本 一冊
蒸気機関規則を付す。
- (64) 保伊源斯蒸気船比較表 写本 一冊
- (65) 求力法論 写本 外題海舟自筆 一冊
- (66) 蒸気機関全書草稿 第一、二篇 写本 二冊
- (67) 蒸気書 写本 一冊 ハ・ホイゲン著
- (68) 蒸気機関 写本 一冊
蒸気機関源理を付す。
- (69) 蒸気戦艦規則 写本 一冊
- (70) 荷蘭国海軍所螺施汽機学書 写本 一冊
- (71) 螺施砲抄訳 写本 一冊
- (72) 烙丸明弁 和蘭写本 ヒュキユルエニン著 一冊
邏媽人欵状 絵入上写本 一冊
- (73) 輿書に「右宝永戊子崎陽所訊邏媽人欵状而此書天明丙午之秋借干関子英而騰写焉 夢遊道人」。ローマ人とはヨワン・シローテのことである。
- (74) 泰西保家必要勉強論 宮崎駿児訳 一冊
- (75) 交隣提醒 雨森芳州著 精写本 一冊
中川忠英の跋を付す。
- (76) 答問十策 写本 一冊
「和蘭ノ交易利害如何」等貿易に関する問答。
- (77) 鳥銃伝来集説 写本 一冊

(78) 他に倭朝銃砲來本記、鉄砲算術書等を含む。
檢使階梯 岡本長之著 写本 一冊
天保六年の自序あり。

(79) 心覚・書拔(鈴木重嶺手記) 二冊

(80) 鈴木重嶺は国学者、歌人、勘定奉行をつとめた。
翠園雜錄 卷六・七 鈴木重嶺篇 写本 二冊
卷七に高橋景保「北夷考証」を収む。

(81) 鴛毛筆余 紫川道人著 写本 一冊

紫川道人とは箕作阮補のこと。

(82) 雅俗混乘 精写本 一冊

明治初期の風俗をメモしたもの。

(83) 瞽者之義取調書 小俣景德自筆稿本 一冊

(84) 致高雜志 第二輯 杉田玄端篇 一冊

「魯西亜使節取扱控」等外交関係記事を収む。

(85) 護国の後論 竹川竹斎自筆稿本 一冊 嘉永七年。

(86) 蝦夷地御仕法 愚意申上候書付 高橋三平自筆稿本
一冊

高橋三平は長崎奉行、松前奉行を歴任。蝦夷地経営につき申上したもの。文化六年。

(87) 魯西亜志 写本 一冊

(88) 鎖国論 写本 一冊

エンチヘルト・ケンペルの『日本誌』の翻譯と思われる。

(89) 漂流記略 塩田須庵著 内田観写本 一冊

弘化二年米国より帰還した阿波の船頭の漂流譚。

(90) 大島友之允朝鮮問題意見書 自筆稿本 一冊

大久保一翁筆出島明雅碑 草稿 一枚 明治二十年

(92) 蕃所調書職員明細帖 一冊

外題に「御支配明細帖」とある。万延元年頃のものか。津田真一郎(真道)、村田蔵六(大村益次郎)、加

藤弘蔵(弘之)らの名が見える。

(93) 長崎海軍伝習所伝習人総名前席順 一冊

(94) 国字分名集 写本 一冊

(95) 公雜誌 写本 一冊

幕末外交係記録綴

(96) 崎陽便覧 向山誠齋写本 一冊

長崎までの宿駅水路を示したものの。

(97) 心養類編 向山誠齋自筆稿本 一冊

外題に丁未雜誌とある。外交関係記事。

(98) 外交関係雜書 写本 五冊

(99) 幕末諸雜記 一括三袋

(100) 東海道便覧 向山誠齋写本 一冊

(101) 御本丸御奥表台寸系惣屋絵図 二枚一袋

(102) 御勘定格帳 写本 一冊

「四冊の内」とあり。天明八年。

(103) 御赦取調方書付 享和三年 一冊

- (104) 廻状控 安政五・六年 二冊
 勝家原本、洋書購入手続のことなどが見える。
- (105) 南曲輪御番・御天守御番・御会所詰御役人改帳 一冊
 安政三年。
- (106) 御触廻状控 一括一袋
- (107) 御所賄向其外凡取調書 一冊
- (108) 近海御備向見分御用留 田付主計原本 四冊
 田付主計は田付流砲術の師範。本書は彼が嘉永三年浦賀へ出張したときの記録。
- (109) 地方御勘定帖 向山誠齋写本 一冊 天保九年。
- (110) 不正之唐物取扱候御仕置 享和三年 一冊
- (111) 御普請積方法 写本 一冊
- (112) 文久二年御書付并御沙汰書 一冊
 軍艦奉行当時、海舟宛に発せられた公文書の控。
- (113) 諸留 神原徳彦編 五冊
- (114) 井上馨自筆書翰 海舟宛 二通一袋
- (115) Voorschrift op bet Truillern. (散兵戦稿) 一冊
- (116) Voorschrift betreffende de Wopens, tot vewardigam

蘭文字本類

- (104) van patronen in de infanteris. 1853 (陸軍省の命令で出版。歩兵の巡邏・射撃を行なうため兵器に関する稿本) 一冊
- (107) Over de bediening van Mortier van 20 duim.
- (108) Onderoijts in de bevestiging der pasten, voor Artistor. (砲術のため命令をよく行なうことの指針) 一冊
- (109) Uittreksel uit het Reglement op de exercitien der Artillerie. 一冊
- (110) Bijdrage tot de kennis der rehoef stoomwerk tingen van de Naderland Sche marine voor H. Huygeno. 1856 一冊
- (111) Kommande-woorden Welke in het Regiment op de Exercitien Manol, urres der Infanterie voor komon (歩兵その他で練兵に用ゐる号令用語)。一冊
- (112) 蘭文文法學習書 一冊
- (113) 蘭文数学學習書 一冊
- (114) 訳鍵 一冊 蘭和辞典 一冊
- (115) 和蘭辞彙 一冊
- (116) Inventaris van het schroefs toowschrijf Jeds. (日本政府所有蒸汽船一覽表) 一冊